

Column

4

ラジオを用いた
〈メディア遊び〉の系譜

溝尻 真也 (目白大学)

1 アマチュアたちと自作の文化

日本でラジオ放送が始まった日は、一般的に1925(大正14)年3月22日とされている。この日の午前9時30分、NHKの前身である社団法人東京放送局が芝浦の仮送信所から「第一声」を発信したことから、1943年、NHKはこの日を放送記念日として制定している。

ラジオを「放送局から発信される番組を聴取する音声メディア」とするならば、日本のラジオの始まりはこの日であるといえるだろう。しかしラジオの楽しみ方は必ずしも番組の聴取のみにはとどまらない。本稿では番組聴取とは異なる、メディアをめぐる技術や知識を獲得し使いこなす楽しさを求めて行われる営みを〈メディア遊び〉と定義し、ラジオを用いた〈メディア遊び〉がどのように変遷してきたのかを概観してみたい。

1920年代前半にアメリカから日本にもたらされた無線技術は、当初は無線電話と呼ばれ、有線電話の延長上にある技術として位置づけられていた。この新しいメディアとしての無線電話の魅力にとりつかれた人びとのなかには、素人の無線研究家すなわちアマチュアたちもいた。既製品の無線機器がまだ流通していないなか、彼らは自身で部品を調達し機器を組み立てては見知らぬ他者とのコミュニケーションを楽しんでいたのである。

一方、放送メディアとしてのラジオに目を向けると、1920年代前半の段階でラジオを放送する主体は必ずしも現在のような放送局に限定されておらず、その楽しみ方も番組聴取のみを前提としたものではなかった。例えば1922年ごろから新聞社によるラジオ放送の公開実験が盛んに行われるようになったが、このときラジオ受信機は「線がないのに遠くの声が聞こえる不思議さ」(竹山2002:17)を体験する一種のアトラクションとして博覧会場や百貨店などに設置されていたという。こ

これらの公開実験は人びとのラジオ熱を高め、その後のラジオ放送開始の機運を醸成した。

こうしてラジオ熱が高まるなか、アマチュアたちはより遠くの電波を高音質で受信するための機器の自作に没頭した。ポスカンザーの推計によると、1925年にNHKの定時放送が始まる直前の段階で、ラジオを趣味にしているアマチュアは全国に5万人ほどいたという（ポスカンザー1996：100）。『無線と実験』（1924年創刊）などのラジオ雑誌も流通しはじめ、ラジオに関する知識の流通およびアマチュア同士のコミュニケーションを媒介する役割を担った。3か月もの間失敗を繰り返したのち初めてラジオ受信機の自作に成功したときの感動がつつられた『無線と実験』への読者投稿には、当時のアマチュアたちの感覚を生き生きと見て取ることができる。

「今日も駄目かなー」と思ひながら鋳石の粗面な所へ針金の先端を入れたのでした。／其の時其の時かすかに音楽のようなものが入ってきました。／二人で見合す顔と顔ニッコリともせず耳をうたぐっていたのでした。／（…）我親愛なるクリスタルセットよ、汝がある為に僕等が如何に苦勞せしか。又如何に今後なぐさめらるるであらうか。実に変化ありし六月九日、永久に忘れてはならない日であらねばならないと僕は考へた。（『無線と実験』1924年11月号：148-149）

黒田勇は当時のラジオ熱について「ラジオファンであることは、ラジオ番組を聴くこと以上に、最新の科学技術の恩恵をこうむっているという満足感、そして最新の技術に関する知識をもっているというフロンティア的な満足感もともなっていた」（黒田1999：133）と論じた。1920年代前半のアマチュアにとってラジオとは、最新の技術を駆

使して機器を自作する楽しさと、自作した機器で遠くの他者とコミュニケーションする楽しさが重なる領域での〈メディア遊び〉を可能にする装置でもあったのである。

2 〈メディア遊び〉としての ラジオ受信機自作の展開

戦前のアマチュアたちに機器の自作や無線コミュニケーションが〈メディア遊び〉として経験されていた一方、ラジオ雑誌は科学技術の知識を広め国家に必要な技術者を養成するためにはアマチュアたちによる無線実験が不可欠であることを強調した。それは電波利用に対する国からの統制が厳しくなるなか、自分たちの〈メディア遊び〉を守るために彼らが主張した論理でもあったが、彼らの必死の抵抗にもかかわらず太平洋戦争開戦までにアマチュアによる無線発信や遠距離受信は全面的に禁止された。こうして戦前のアマチュアたちによるラジオを用いた〈メディア遊び〉は縮減し、ラジオの役割は番組を聴取することのみへと一度は収れんしていった。

しかし戦後になると、ラジオを用いた〈メディア遊び〉は再び盛り上がりを見せることになる。ラジオは数少ない情報源であると同時に貴重な娯楽メディアでもあったが、極度の物資不足のなか既製品のラジオもまた不足していたため、多くのラジオ受信機が自作された。それに伴い受信機自作に〈メディア遊び〉の楽しみを見いだす人の数も増えていった。

戦前から続く『無線と実験』に加えて、戦後は『ラジオ技術』（1947年創刊）、『初歩のラジオ』（1948年創刊）、『模型とラジオ工作』（1952年創刊）など複数のラジオ雑誌が創刊された。子ども向け科学雑誌『子供の科学』に掲載された工作記事をジャンル別に分析した辻・塩

谷（2018）によると、同誌の工作記事全体に占める「ラジオ・無線機」が登場する記事の割合は、艦船、飛行機、鉄道といった他ジャンルと比べて高く、特に戦後は早い段階から安定した出現回数を記録していた（辻・塩谷2018：21）。

また戦後はラジオ受信機自作の初心者に向けて、組み立て方法が載った説明書と必要な部品をセットにしたキットが広く販売されるようになり、手軽に自作する楽しさを体験できるようになった。さらに1951年に始まった中学校の職業・家庭科（1962年以降は技術・家庭科）ではカリキュラムのなかにラジオ受信機製作が盛り込まれ、学校の授業でも自作の楽しさを体験できる状況が整備された。

3 拡大する〈メディア遊び〉：アマチュア無線，オーディオ，マイコン

一方、戦前のアマチュアたちが行っていた無線コミュニケーションは、戦後になるとアマチュア無線趣味として拡大した。1952年7月に個人による電波の送受信が解禁されると、免許を取得したアマチュア無線家たちが無線を介した双方向コミュニケーションを楽しむようになる。解禁後1962年までの10年間で約2万局のアマチュア無線局が開局し、1994年にピークとなる136万局を記録するまでその数は増え続けた（総務省総合通信基盤局2023：12）。アマチュア無線家には無線機器を自作する者もあり、その多くはラジオ受信機自作からさらに複雑な無線送受信機自作へと自身の〈メディア遊び〉をステップアップさせたアマチュアたちだった。

ラジオ受信機自作はほかにもさまざまな趣味への入り口になった。1950年代後半以降人気を博したオーディオ趣味もその一つである。プレーヤー、アンプ、スピーカーなどを組み合わせて理想的な高音質での

レコード再生を目指すオーディオ趣味は、電気や音響の知識が必須になる。ラジオ受信機自作を通してこれらの知識を学び、さらなる高みを目指した人の多くがオーディオ趣味に熱中した。オーディオマニアは原音に忠実なレコード再生を目指して機器の構造や組み合わせを試行錯誤するが、その忠実であるべき原音は聴き手自身の想像のなかにしかないものである（増田・谷口2005：203）。明確なゴールが存在しないオーディオ趣味は、マニアにとってどこまでも追求し続けることができる終わりなき〈メディア遊び〉だった。

1957年に実験放送が始まり1970年に本放送が開始されたFM放送は、〈メディア遊び〉としてのラジオ受信機自作とオーディオ趣味が交錯する地点に成立した放送メディアだった。当初、国は文化・教育振興のための電波としてFMを活用することを企図していたため、NHKのFM実験放送ではクラシック音楽が中心的に放送され、民間FM実験局（東海大学超短波放送実験局、現FM東京）では通信制高校の生徒に向けた教育番組と、やはりクラシックを中心とした音楽番組が放送されていた（松前1996：25-26）。しかし既製品の受信機が普及していない実験放送の段階でFMを聴取できた人の数は少なく、リスナーの多くは受信機を自作することができるラジオ愛好家やオーディオマニアだったという。

AMよりも高音質でしかも音楽番組を長時間放送してくれるFM実験放送は、オーディオマニアの間で話題となった。放送局もこうした熱心なリスナーを次第に意識するようになり、自ら音楽メディアとしての役割を担うようになる。結果的にFMは無料で高音質の音楽が楽しめる放送メディアの位置を確立し、1970年代以降はラジカセを用いたラジオ番組のテープ録音、すなわちエアチェックの格好の対象になった。

ラジオ受信機自作はその後のマイコン文化にも接続している。1970年代後半から80年代前半にかけて、個人でコンピューターを所有し

ゲームなどを楽しむマイコン文化が開花した。1969年に創刊された老舗の『bit』を筆頭に1970年代にはコンピューター雑誌も次々と創刊されたが、コンピューターのシステム構成がまだ自明のものではなかったこの時期、こうしたコンピューター雑誌にはディスプレイやキーボードを自作するためのノウハウが掲載されていたという。当時のマイコンは「自作技術と財布との相談において自分で選択し獲得してゆくもの」（野上2005：80）だった。

そして初期のコンピューター雑誌はラジオ雑誌との親和性も高かったという（野上2005：84）。前述した『無線と実験』は1956年9月号から「エレクトロニクス技術」という副題を掲げオーディオを中心とした電子技術雑誌として自らを位置づけるようになり、さらに1970年7月号からは「stereo technic」へとその副題を変化させている。これらの変遷を鑑みると、ラジオ受信機自作に内包されていた電子技術を用いて機器を組み上げる楽しみが、ラジオからオーディオへ、そしてマイコンへと拡大していったのが1950年代から80年代の流れだったといえるのではないか¹⁾。

4 〈メディア遊び〉が放送史に果たす役割

ラジオは電子技術を前提に成立したメディアであり、利用者の日常に密着しながら生活空間に浸透したメディアでもある。その意味でラジオは生活者と電子技術との接点として機能したメディアだった。ラジオは装置を自作する楽しみを享受する〈メディア遊び〉の一つとして経験されるとともに、アマチュア無線やオーディオ趣味、マイコン文化など、より専門的な技術を必要とする〈メディア遊び〉への入り口としても機能した。

これらの〈メディア遊び〉は、戦後日本の電子工業を支える技術者を育成する役割も果たした。1960年代には日本製のトランジスタラジオが、そして1970年代にはラジカセが日本を代表する電子製品として欧米諸国へ輸出されたが、こうした製品を開発・生産する技術者の多くが、少年時代にラジオ受信機自作を経験していたといわれている（高橋2011：2）。

放送技術の歴史の変容は、ラジオやテレビの在り方を強く規定してきた。そうした「大文字の放送技術史」から見れば、ユーザーによるテクノロジーとの戯れ＝〈メディア遊び〉の歴史はあまりにも小さな存在に見えるかも知れない。しかし、少なくともラジオの歴史は〈メディア遊び〉とともに始まり、その後もラジオは〈メディア遊び〉の楽しみとセットで受容されてきた。そしてラジオを用いた〈メディア遊び〉は、隣接領域に多様な文化を生み出してもきた。ユーザーの立場から技術の歴史を振り返るとき、この〈メディア遊び〉という視点はわれわれに重要な示唆を与えてくれる。

注

- 1) ただしラジオが可能にする〈メディア遊び〉は、機器の自作に端を発するものだけに限られるわけではない。例えば1970年代に流行したBCL（Broadcasting Listener）と呼ばれるラジオ番組の遠距離受信や、1980年代前半に起きた、個人が開設する微弱電波を用いたラジオ局（ミニFM局）の流行なども、ラジオを用いた〈メディア遊び〉として位置づけることができるだろう。

参考文献

- 黒田勇（1999）『ラジオ体操の誕生』青弓社
- 増田聡・谷口文和（2005）『音楽未来形：デジタル時代の音楽文化のゆくえ』洋泉社
- 松前紀男（1996）『音文化とFM放送：その開発からマルチ・メディアへ』東海大学出版会
- 野上元（2005）『『マイコン』と『パソコン』のあいだ：パソコン雑誌『1/O』にみる、早期採用者たちにおける情報技術の私有化について』『社会情報学研究』9（2）、日本社会情報学会事務局：73-86
- ボスカンザー、デボラ・R（1996）「無線マニアからオーディエンスへ：日本のラジオ黎明期におけるアマチュア文化の衰退と放送文化の台頭」（古賀林幸訳）水越伸責任編集『20世紀のメディア1：エレクトリック・メディアの近代』ジャストシステム：93-115
- 総務省総合通信基盤局（2023）「ワイヤレス人材育成のためのアマチュア無線の活用等に係る制度改正案（要旨）」
- 高橋雄造（2011）『ラジオの歴史：工作の〈文化〉と電子工業のあゆみ』法政大学出版局
- 竹山昭子（2002）『ラジオの時代：ラジオは茶の間の主役だった』世界思想社
- 辻泉・塩谷昌之（2018）「男性的趣味の形成と変容：戦前／戦中／戦後の『子供の科学』の内容分析から工作趣味、鉄道趣味を考える」『中央大学文学部紀要 社会学・社会情報学』28, 中央大学文学部：1-27



溝尻 真也（みぞじり・しんや）

目白大学メディア学部准教授。

主な著書 『ビデオのメディア論』青弓社、2022年（分担執筆）／『スクリーン・スタディーズ：デジタル時代の映像／メディア経験』東京大学出版会、2019年（分担執筆）／『メディア社会論』有斐閣、2018年（分担執筆）／『メディア技術史【改訂版】：デジタル社会の系譜と行方』北樹出版、2017年（分担執筆）